
北海道大学総合博物館 ボランティア ニュース

No. 31 2013. 12

特別寄稿

木原 均先生小伝 ～研究と探検とスポーツと～ ②スポーツマンの顔 木原ゆり子 --- 1

談話会報告

エレナさん、「パカ・パカ」 石川恵子 ----- 4

博物館訪問

中谷博士が関係した零戦の翼 沼田勇美 ----- 6

活動報告

穂別の恐竜発掘レポート 中野系 ----- 7

宇宙の4Dシアター新たな試み ―企画展との連動― 山本順司 ----- 8

ポプラチェンバロと仲間たち 松田祥子 ----- 8

正岡子規と陸羯南の明治新聞『日本』 久末進一 ----- 9

特別寄稿

木原 均先生小伝* ～研究と探検とスポーツと～ ②スポーツマンの顔

木原 ゆり子

学業半分・夏は野球

中学生まで勉強も運動も「味噌っかす」だった父は、受験に失敗した浪人中、近所の空き地で野球とテニスに熱中して腕を上げていた。北大予科に入学して恵迪寮に入ると、新入生と寮生の対抗野球試合があり、これに出たのがきっかけで野球部に勧誘される。

北大野球部の『部史』(1938)を見ると、青年時代の父の足跡が残っていた。1913(大正2)年の記事に「新人木原君は打っては二塁打二本を放ち、守っては七つのレシーブを誤りなく果し、素晴らしい功名を残せり。」とある。また、野球部の先輩樋口桜五氏の思い出話にも、「大正元年9月、明治天皇ご大葬のその夜、2年生になった私は上野を立てて札幌へ帰ると恵迪寮に新入生木原がいた。やがて野球部へ入ってきた。右打ちばかりの当時、強い当たりがよく飛んでゆく三塁をうまく守って強肩、攻めては強打者の三番サード木原、まさに長島というところ。」(東京エルム新聞, 1975)とある。

本科生になると、今度は投手となって活躍し、1917(大正6)年の対函館大洋倶楽部戦では、北海タイムスに「木原君は正鵠なる制球と不可思議なる緩急とをもって相手の猛打を封じた。」と報じられている。

卒業後の進路については、学業で目立たなかったのか、当時の野球部長には満鉄の野球チームに入ればよいと言われたり、友人には理論にうるさいからスポーツ記者がよいのではないかなどと言われ、学者になるとは誰にも予想されなかったらしい。1920(大正9)年、卒業後は京都大学に移って学問の道に進んだが、毎年夏休みには札幌で小麦の研究を続けるかたわら、野球部のノック役も務めて後輩に猛特訓をしている。

北大時代の父のあだ名は名前の「均」を音読みにした「キンさん」であった。前述の樋口氏には、「いつもキンさんと一緒に遊んでいたもので、学生時代は勉強する暇がなかった！」とからかわれていた。野球仲間の会は生涯続き、宴の最後は、必

*タイトル「木原 均先生小伝」は編集委員会による。

写真はすべて木原ゆり子氏所蔵

ず「アインス・ツヴァイ・ドライ！」の掛け声とともに『都ぞ弥生』の大合唱で締めくくられるのだった。

父は、運動部で得たものは、仲間との協調の精神と苦境にある時にも奮い立つ勇氣、そして生涯変わらない友情こそ最大の収穫だったと誇らしげに語っている。

学業半分・冬はスキー

父が予科に入学した1912(大正元)年は、北大文武会スキー部が誕生した年である。だが、北大のスキー史は、1908(明治41)年に始まっていた。スイス人のドイツ語講師ハンス・コラー先生によってスキーの道具一式がもたらされていたからである。しかし、コラー先生はスキーの実技は未経験で、ドイツ語会話の教材として使われただけだった。当時の学生たちは一台のスキーで代わる代わる実践を試み、馬櫓屋さんに無理やり似たものを作らせて練習に励んだという。父は北大スキー部史上、自分は四代目位だと言っていたが、コラー先生とスキーを始めた諸先輩を初代と考えていたのだろう。

1916(大正5)年、北大水産学科の遠藤吉三郎教授が留学先のノルウェーから、二本杖のスキー一式を持ち帰られると、スキー部ではそれまでの一本杖のアルペンスキーに代って、二本杖のノルウェー式スキーが普及するようになった。先生から理論と実技を教わった学生たちは山スキーを習得して、毛無山(小樽)、手稲山、羊蹄山、十勝岳、芦別岳と次々に雪山を踏破した。日本のスキー登山の始まりである。

もう一つ遠藤先生が日本のスキー史に貢献されたのはジャンプである。当時、北大生の大矢敏範氏が小樽で独学でジャンプの練習に励んでいたが、先生はジャンプ台がなければ技術の進歩はない、ジャンプ台を作ろうと言われ、小樽で先生とともに金槌を振って作ったのが、日本初となる仮設ジャンプ台であった。その頃の大矢氏の飛距離は15~16mだったが、のちにこの台で21m飛んだ時は、「観衆は肝を冷やした」という。日本のジャンプスキーの始まりである。

ジャンプ理論に熱中した父は、昼はジャンパーの飛行姿勢をカメラに収め、夜は押し入れで現像した写真を見せながら、スキー術の原書と比較してフォームを分析し、アドバイスするコーチ役を務めた。



東北帝国大学農科大学文武会野球部のエース木原均(22歳、1915年)。場所は現在のエルムの森(総合博物館の南側)。当時は現在のエルムの森~総合博物館(旧理学部)が「運動場」だった。背景右側の建物は林学教室(現在の古河講堂)。左腕のACのモノグラムは農科大学(Agricultural College)を意味する(大学文書館のご教示による)。

中浦皓至氏の『日本におけるジャンプスキーの発達に関する歴史的研究』(2003)には、「木原はスキーを単なる遊びとしてではなく、理論的に分析して科学として考えようとしていた。北大スキー部に創設直後からスキーを学問的に考えようとする気風が作られたのは、北大が最高学府であったからだけではなく、パイオニアとしての木原の影響が大きかった。」とある。

スキーに明け暮れていた父が初めて出版した本は、遠藤吉三郎先生との共著『最新スキー術』(1919、博文館)であった。スキーがスポーツとしてのみ知られ始めた時期に、日本の積雪地帯の生活必需品であることを知らせたいという動機から書かれたので、実技の手引きだけではない内容になっている。

1925年から父はドイツに留学したが、雪の季節には北欧三国をスキー行脚したり、スイスからイタリアまでスキーツアーを試みている。サン・モリッツでは、地図を頼りに数日独りで山谷を滑り、榎有恒・松方三郎・松本重治・浦松佐美太郎・麻生武治の雪友たちと山スキーを楽しんだ。ジャンプにも挑戦した写真が1枚残っているが、裏面にはドイツ語で“飛距離約22m。足が曲がっている。スキーが揃っていない。”と自己批判。また、ダヴォスのパルセンスキー場に行き、標高約

2,800m まで登り、標高差 2,000m ほどのスキー滑降を 1 時間半弱で行ったことも日記に書き残している。

留学中にもかかわらず、スキーばかり楽しんでいるようだが、1926 年には、フィンランドで開かれた国際スキー連盟(F I S)の会議に日本代表として出席し、日本の正式加盟の任を果たしている。その時加盟国はわずか 16 カ国だったという。

スポーツを科学に

1936 (昭和 11) 年の第 4 回冬季オリンピック (ガルミッシュパルテンキルヒェン、ドイツ) でジャンプ 7 位に入賞した伊黒正次氏は、座談会で「オリンピックの有力候補になると、先輩を介して木原先生からドイツ語を勉強するようにいわれ、先生の友人であるスイスのストラウスマン博士の『スキー・ジャンプの航空力学』のパンフレットを渡されました。オリンピックではこのストラウスマン理論を応用して飛んだのです。この後、先生から“外国で競技をする日本人は、国内同様のリラックスができず、記録が落ちる。それは言葉を話せないからだ。それに今は追いつけ追い越せの時代で、読むべき外国のスキーの文献は山積している。競技者が読解出来れば一番だ”と直接言われました。今は文献をあさる必要はないかもしれませんが、リラックスの方法は変わらぬ真理でしょう。

先生は全日本スキー連盟の技術委員長を 8 年、副会長を 6 年、会長を 10 年も務め、その間、第 8 回冬季オリンピック (スコーバレー・米国、1960)、第 9 回冬季オリンピック (インスブルック・オーストリー、1964) の選手団長を 2 回、国際スキー連盟理事を 6 年間続けられました。これは何人も肩を並べることのできぬ大記録です。」(木原記念財団 NEWSLETTER, No. 8, 1993) と話されている。

そうした異例の長期にわたる役員就任が続いたのは、父がスポーツ選手出身ではなく、いかなる団体にもしがらみのない畑違いの学者だったからであろう。しかし、根性主義・精神主義絶対の時代に、科学的トレーニングを提唱し、負けた時に敗因を詳しく分析することは理解されなかった。インスブルックでのオリンピックで惨敗した時の記者会見で、「選手諸君はよく頑張った。ゴールド・メダリストだけでオリンピックは成り立たない。」と発言して、海外の記者には受けたが、日本のメディアには「敗戦の将、居直る」と叩かれて



シュプーールを描いて (23~24 歳頃、1916~1917 年頃、場所は不明)

いる。

オリンピックへの警鐘

第 11 回冬季オリンピック・サッポロ大会 (1972) では組織委員を務めていた。オリンピックの開催地には各国の選手団に随行してスポーツドクターが世界中から集まってくる。サッポロ大会の時は、『国際冬季スポーツ医学会議』が開催され、父は会議に先立ってスポーツドクター向けの記念講演を行なった。タイトルは『通し矢の由来とその興亡』である。

講演の内容は、世界でも珍しい日本古来の弓による競技の歴史を紹介し、技術の進歩と道具の改良で記録がどのように伸びたか、現役の若く優秀な射手を選んで、競技がどれほどの耐久力を必要としたかを医学的に実験し、その結果を考察したものである。しかし、本当に伝えたかったことは、次の短い結びの言葉に集約されていた。

「通し矢は、古代日本の独創的な弓の競技である。その初め武道として出発し、技術を仏の前に奉納したものであった。射手は 1001 体の観音像に弓術の進歩と戦場における加護を祈った。であるから参加することが価値あることであった。それが後には藩侯の名誉のためにするゲームとなり、記録保持者は自国では英雄としてあがめられた。それだから、訓練は苛酷となり、費用は莫大となった。

このような事情に加えて武士階級の没落と、最高の榮譽である『天下惣一』の額を掲げることの禁止がこの通し矢の滅亡に拍車をかけた。通し矢の歴史を通じて、われわれはクーベルタン氏によって再興された近代オリンピック競技の将来を占う教訓が得られることと思う。」



ストー(裏にアザラシの皮を貼付けた、サハリンや沿海州のアイヌが使用していたスキー)を履いて (27歳、1920年、樺太にて)

札幌でこのように述べてから 42 年。2020 年にはオリンピックとパラリンピックが東京で開催されることが決まったが、世の中は父が危惧した時代とあまり変わっていないように思える。スポーツ界には相変わらず根性論が存在し、マスコミにも人々にもメダル至上主義が蔓延している。スポーツが競技である以上、勝利を願わない者はいない。だが、期待が高まれば高まるほど結果が外れたときの失望は大きい。落胆は敗者への非難に変わり、どんどんエスカレートする。昨今のこうした風潮を目にしたなら、父は再び何を語るだろうか？

談話会報告

エレナさん、「パカ・パカ」

チェンバロ ボランティア 石川 恵子



エレナさんの講演風景

エレナ・アンドロエワさんは、2008年10月から北大大学院理学研究科地球惑星科学専攻に留学し、修士から博士課程に進学され、今年2013年9月に学位を取得されて、同月30日にロシアに帰国されました。今後は、故郷カムチャツカの地震火山研究所に勤務し、カムチャツカ国立大学でも教鞭をとられるそうです。学位取得と帰国を機に、9月27日(金)午後4時から5時半まで、北大総合

博物館 N320 室にて、エレナさんの講話があり、引続き懇親会が催されました。

20名の、主にボランティアの方々を対象に、エレナさんの専門の「カムチャツカ中部の貴金属鉱化作用の成因」のお話の他、ロシア及びカムチャツカの歴史、風土、生活などのお話を、松枝先生の解説を交えて、英語で話されました。専門分野のお話はよく分かりませんでした。地下資源が豊かで温泉も多いこと、温泉には日本と違って水着を着て入ること、幹線道路が一本通っているだけで交通の便は良くないこと等々、興味深いお話を伺いました。半島西部のご実家に帰られるのも大変なようです。

終了後、ボランティア室で11名の参加で懇親会が催されました。私はエレナさんに喜んで頂きたいと思い、着物で参加しました。事前に沢山の食物や飲物、更に星野さんのお手料理の数々(栗ごはん、かぶのお漬物等々)が用意され、8時まで楽しい歓談のひと時となりました。松枝先生は乾杯用に、なんと2万年前の南極の氷をお持ち下さり、一同で紙コップを耳に当て、氷の融ける神

秘的な音に暫し聴き入り、思い出に残る懇親会となりました。

エレナさんの来札と、私がチェンバロ・ボランティアとして博物館に通うようになったのは同年ですが、ある秋の日の夕方、帰りに玄関で偶然一緒になったことが初めての出会いでした。同じ方向に帰ることになり、「雨ですね」、「どちらから?」・「ロシア」というわけで、「赤いサラファン」等のロシア民謡を一緒に歩きながら歌いましたが、「黒い瞳」は知らないけれど「すずらん」は知っているとのことでした。

その後も館内や道で出会った時の笑顔が印象的でした。コンサートや練習でチェンバロを弾いている時に、気が付いたら彼女が椅子に座って聴いていたということも度々でした。研究の合間に、少しでも休憩に来てくれていたようです。会った時は「プリーヴェット」、別れる時は「パカ・パカ」*と言ってほしいとのこと、必ずそう言いました。初めの頃は「リ」を巻き舌にするようにと発音を直されましたが、会うたびに「ヨクオボエテマスネ」と嬉しそうでした。いつも一言、二言話して別れますが、「日本語が難しい」「頭が痛い」「これから研究発表がある」等、慣れない日本での生活は大変だったようです。「大丈夫よ」と握手し、「パカ・パカ」と手を振って笑顔で分かれます。ある時、髪を白く染めると言うので反対しましたが、美容院で染めたという髪を見て安心しました。いく筋か白く染めてあるだけで素敵でしたので、「プリティ」と言うと、にっこりしました。一度、私の家に来られた時は、振り袖の着物を着て頂き、写真に撮って記念に差し上げました。よくお似合いです。

今年の春以来会う機会もなく、既にロシアに帰られたのではと思っていましたが、ずっと研究室に籠って論文に取り組んでいらしたようで、そのため体調を崩し、病院に罹っていたと伺いました。学位論文の立派な御本を拝見しましたが、どれ程大変だったか、何か私に出来ることはなかったかと、哀れにも思いました。懇親会の帰り路、日本

語で「苦あれば楽あり」ということ、また「楽あれば苦あり」で人生はその繰り返しであることを、娘にでも諭すように話したのですが、分かってくれたように思えました。最後に信号の分かれ道で「お元気でね」と抱きあって、「パカ・パカ」と手を振って別れたのですが、「ワタシ ミソシル スキデス」と言っていたエレナさんに、日本食をご馳走していないことが心残りです。もし再会出来れば、その時のお楽しみにしておきましょうか。

エレナさん、お元気でご活躍くださいね。「パカ・パカ」。



エレナさんと筆者



エレナさんを囲んで

*どちらも親しい間柄で使われ、プリーヴェットは英語のハロー、パカパカは英語のバイバイに近い。

中谷博士が関係した零戦の翼

図書ボランティア 沼田 勇美

秋晴れの平成 25 年 9 月 8 日。倶知安風土館を訪れた。住所は、倶知安町北 6 条東 7 丁目。ここには中谷宇吉郎博士らが戦時研究した旧日本軍の海軍零式艦上戦闘機「零戦」の右翼が展示されている。ボランティア・ニュース 24 号から 29 号までに中谷宇吉郎先生小伝シリーズが連載されたが、「ニセコ山頂の航空機の着氷実験記事」が無いことに気づいた。「風土館」訪問時には「雪と氷の科学者・中谷宇吉郎展・特別号(13 ページ)」を持参した。そして展示説明してくれた岡崎毅館長にその特別号を進呈してきた。

この零戦の右翼は、戦時中にニセコアンヌプリ山頂に実物の戦闘機を運び上げ、厳冬期の山頂で着氷実験をした残骸の一部です。

記録によると中谷宇吉郎博士の企画に基づいて、ニセコアンヌプリ山頂には 50 名程が宿泊できる研究宿舎が設置され、北大の研究者や軍部の研究者も滞在した。戦後は、進駐米軍の眼から逃れるために山の谷間に機体が捨てられたそうです。

戦後しばらくして、ニセコの夏山登山していた人が、大きな残骸を見つけ、何度か新聞報道され、のちに倶知安風土館に運びこむことになった。長さは約 5m、重量は約 150kg もあるそうです。搬出は山頂から麓まで人力で行った。展示品は零戦の右主翼で、平成 2 年に北海道新聞社が特定し、平成 16 年に風土館が回収したもの。山頂には風洞室もあって、研究に利用されていたが、後に北大農学部地下室に保存、大きな物なので解体されてしまった。

翼から読み取れること

- ① 腐食の比較 : 翼は桁と外板とは異なる質のジュラルミンで出来ており、腐食の程度も異なっていることから、それぞれの腐食の比較ができる。
- ② 試作機 : 翼端部に折りたたみ用のヒンジが残っていることから、零戦 21 型から 32 型への改良試作機であることが認識できる。

- ③ 工作技術 : リベットの打ち方から、当時の工作技術の習熟の度が読みとれる。



筆者と零戦の右主翼(倶知安風土館にて)



風土館に展示してあった零戦の写真



ニセコ観測所における零戦除氷翼実験(1944年)「写真集北大125年」より

穂別の恐竜発掘レポート

化石ボランティア 中野 系

今年(2013年)7月17日むかわ町で日本最大級の恐竜が発見されたというニュースが大々的に報道されました。この恐竜の発掘に関し、この紙面をお借りし、発掘体験の一部を皆様にご報告致します。

【経緯】発表された化石(尾椎)は、実はすでに2003年に発掘されたものであり、首長竜(恐竜とは異なる海生の爬虫類)と思われ、長く穂別の博物館に眠っていたものです。

しかし、首長竜の専門家が「これは首長竜ではない」と指摘したことから、本博物館の小林快次先生が詳しく観察し、草食恐竜ハドロサウルスの尾椎であることが判明しました。さっそく発見者の堀田良幸氏と共に先生は現地をつぶさに調査し、まだ残りの部位が埋もれていると予測し、今回の発掘へとつながった次第です。

【発掘作業】2013年9月22日、我々の発掘が始まりました。現場は国道(274)と穂別博物館の間に位置し、急斜面の崖の下に奥行5m、高さ2mに掘り下げられ、そこを中心に化石の発掘作業が始まりました。小林先生が陣頭指揮を取り、穂別博物館の関係者や北大の学生、院生、ボランティアの人等が参加し、延べ20人以上が携わる大掛かりな作業になりました。

作業は大きく分けて3チームに編成され、最初のチームは記録や写真を担当。ここでは恐竜化石だけでなく、同じ地層から見つけられた二枚貝、巻貝、アンモナイト等もれなく記録されます。もう一つのチームはジャケット巻きを行います。これは石膏を溶いた水に浸したキャンバス(麻布)を露出した化石に巻き付け、それによって化石の保護を行います。勿論、手は真白になります。最後のチームはハンマー、タガネ、ピックル等で化石を取り出すために、ひたすら母岩を削る作業です。場合によっては削岩機を使用することもあります。

作業時間は朝7時半に現地博物館に集合し、昼食をはさんで夕方4時半に終了、後片付けをして終わります。作業中、時々崖から砂や小石が落下しヘルメットや背中に当たるので危険を感ずることもありました。

しかし、一方、現地で採取したマツタケのバター炒めを食したり、昼休みのスイカ割り等が緊張と疲労を和らげるカンフル剤になりました。

【発掘の成果と今後】発掘作業は本年10月5日をもって終了し、すでに埋め戻され、来年の再開を待ちます。後脚、足の指、肋骨等多くの部位が穂別の博物館に保管されました。頭部を含めまだ見つかっていない部位は、来年以降の発掘に期待がかかります。既に発掘済みの化石だけでもかなりの量になるため、北大が化石のクリーニングのお手伝いをするようになるかもしれません。全長約8mと推定されるこの恐竜の復元を想像すると今から本当に楽しみです。なお、来年の作業環境は今年より改善され、落石防止ネットの敷設、簡易トイレや休憩所の設置も検討されているようです。

【詳しく知りたい方へ】この発掘レポートに関しインターネットで公開していますので興味のある方は「穂別博物館/POMU/MUKAWA」で検索してください。



北大総合博物館の公式 facebook より

宇宙の4Dシアター新たな試み ー企画展との連動ー

北大総合博物館准教授 山本 順司

今夏の大型企画展「巨大ワニと恐竜の世界」は開幕一ヶ月を待たずに2万人のご来場者を迎え、館内は大変なにぎわいを見せていました。宇宙の4Dシアターボランティアではこの企画展をさらに盛り上げようと、新たな試みとして企画展との連動に挑みました。当ボランティアは名前の通り宇宙を対象とした立体像投影を主軸に活動していますので、これまで地球関係展示との協働は困難だと考えていました。ところが、化石ボランティアとしても活躍しておられる田中公教さんが入会されたことを機に状況が変わりました。

恐竜の世界を謎めいたものにしてるのはその突発的な絶滅ではないでしょうか。恐竜の絶滅をもたらした事件の一つは小惑星の衝突です。そうです。この少々迷惑な宇宙からの贈り物を軸にすれば4Dシアターと企画展を連動させることが可能と、田中さんを中心に公演準備が始まりました。

そして、8月11日および17日の本番を迎えました。公演のタイトルは「宇宙のかたすみの生命史ーワニと恐竜の物語ー」。構成は宇宙編・恐竜編の二部立てになっており、まず宇宙編で宇宙のあちこちを一緒に旅して戴きました。そして、宇宙の大きさや小惑星帯の位置を実感して戴けた段



4Dシアター公演風景

階で恐竜編に移行し、小惑星の衝突によってワニと恐竜の世界がどうなってしまったのかを4Dシアターとサブモニターを駆使して解説しました。もちろん当公演が企画展の一助になることを願って公演の最後には企画展との繋がりを忘れず紹介しました。ご来場者から戴いたアンケートからは、皆さんに大変満足戴けたことがわかり、また、企画展との連動に対する賛辞も戴きましたので、今回の試みは目的を達成することができたと感じています。

文末になりましたが、当公演を支えて下さった皆様やご来場戴いた皆様に心より感謝致します。

ポプラチェンバロと仲間たち

チェンバロ ボランティア 松田 祥子

北大総合博物館1階「知の交流コーナー」にある「ポプラチェンバロ」。このピアノに似た鍵盤楽器を中心に活動する「チェンバロボランティア」の登録者は、当然、チェンバロや他の鍵盤楽器を弾く人ばかりかと思われるでしょう。実際は、ご自分でチェンバロを弾かれる方はもちろん、チェンバロは弾かないけれども楽器自体に興味がある方、調律をなさる方、チェンバロと同時代に使われていた他の楽器を演奏する方・・・など、登録者は様々です。

かくいう私も、チェンバロが活躍したルネサンス、バロック時代に一緒に使われていたヴィオラ・ダ・ガンバという弦楽器を趣味で弾いていることから、縁あってボランティア登録しています。チェンバロをはじめとするルネサンス、バロック期の楽器は、構造上からも大きな音量は出ませんが、その分、繊細で独特な音色や雰囲気を持っており、博物館のような場所でお聴きいただくにはちょうどよいものです。

登録者には他にも、歌やリコーダーなどを演奏



主役のポプラチェンバロ

する方々がおり、カルチャーナイト、博物館祭りなどの博物館行事、ミニコンサートや登録者各自での企画コンサートなどで、色々な楽器とともにポプラチェンバロが奏でられるのを聴きになったことがある方もいらっしゃるかと思います。私は社会人ボランティアなのでなかなか頻繁に活動できるわけではありませんが、これまでにいくつか合奏に参加させていただく機会がありました。皆さん忙しい中、決して多くの時間を合わせの練習には取れませんが、できる範囲で精いっぱい演奏を聴いていただけるよう、頑張っています。

春にメンテナンスにいらしゃった、ポプラチェンバロの生みの親、横田誠三さんは、チェンバ



4月のミュージアムコンサート終了後(左から2人目が筆者)

ロは独奏だけではなく合奏でも弾かれることで、その色々な良さを知ってもらえます、と仰っていました。合奏に参加することで、そんなチェンバロの色々な面を知っていただけるとよいな、と思います。

ポプラチェンバロは、台風の倒木から生まれたというドラマチックな生い立ちを持っており、素朴な外観と素敵な音色の愛すべき楽器です。見た目も美しいですが、やはり楽器はその音色を聴いていただくのが一番。ポプラチェンバロの魅力を、博物館にいらした方に少しでもお伝えすることができれば幸いです。

正岡子規と陸羯南の明治新聞『日本』

図書ボランティア 久末 進一

北大総合博物館植物研究室でボランティアたちによってこのほど発見された標本乾燥の挿み紙古新聞紙の中に、明治期に発行された新聞『日本』[1906(明治39)年10月27日、28日号:東京神田きじ子町32番地、日本新聞社刊]が含まれていた。

この第6206、6207号は一部が半切状態。それでも日清・日露両戦争後の国内外の情勢や言論界の思潮、世相が、断片的ながらも掲載記事から読み取れる。

同紙は司馬遼太郎の長編歴史小説「坂の上の雲」でも紹介された、近代俳句の祖とされる正岡子規(1867~1902)を生み育てた新聞としても有名である。新聞『日本』は政治風潮のナショナリズム

を叫ぶ民族主義(国民主義)的言論人、弘前藩士族出身の陸羯南くがかつなん(1857~1907)によって谷干城、近衛篤磨ら政財界の要人の支援を得て、1889(明治22)年2月11日に創刊された。社主で主筆の信念による自論を貫き、「まっかつ鞅」(7、8世紀頃中国北東部で勢力をふるった民族)の脅威に屈せぬ気概をうたった自作の詩「まっかつ風涛鞅羯南より来る」から「羯南」と号した陸実くがみのる(本名中田実)は政府の不正を批判する。鹿鳴館時代の欧化主義と外国人法官任用の大隈重信の条約改正案に反対し、日清戦争に伴う大アジア主義、そして国粹主義へ向かい、とくに藩閥政府を厳しく糾弾して、節操ある新聞人として硬派の論客には支持されたが、何



発見された明治の新聞「日本」

度も発行停止処分となり、経営難に苦しんだ。

一方、伊予松山藩士族出身の正岡子規（幼名升^{のぼる}、本名常規^{つねのり}）は上京して帝国大学文科大学国文科に入学するが、肺を病んで中退。1892（明治 25）年、東京市上根岸 82 番の羯南宅東隣の借家に母、妹と同居して、同年 11 月日本新聞社に入社する。

『日本』に俳句欄を設け、「獺祭書屋俳話」を連載、評判となる。羯南に認められ、1894（明治 27）年、28 歳の時に姉妹新聞『小日本』の編集責任者となるが経営に失敗、廃刊となり、再び『日本』に戻って健筆をふるう。この間、同社に出入りしていた三宅雪嶺、佐藤紅緑、長谷川如是閑ら文士と親交を結び、1897（明治 30）年俳諧誌「ホトギス」を運営し、高浜虚子、河東碧梧桐ら多数の俳人を指導。漱石が小説「坊ちゃん」を同誌に発表する。『日本』に「歌よみに与ふる書」（1898 年）発表後、1901（明治 34）年には同紙に「墨汁一滴」を 1 月 16 日から 7 月 2 日まで連載。翌年に「病牀六尺」を『日本』に 5 月 5 日から 9 月 17 日まで連載し、9 月 19 日に病死した。享年 36 歳だった。

その後、日本は日露戦争へ突入していき、新聞『日本』も国策や戦略をめぐる激的な論陣を張る。やがて、戦争が終ると陸羯南は 1906（明治 39）年の年末、燃え尽きたかのように経営権を譲って引退、翌年病死する。享年 51 歳。社員も総入れ替

えとなり、社風も論質も全く変わる。言論弾圧に屈せず、主筆が主義主張を貫く時代は終り、新聞社もまた経営重視の時代へ変るのである。廃刊は 1914（大正 3）年 12 月。このほど見つかった同紙には、まさに羯南の志をしのばせるような激烈な口調の記事が見られる。

戦勝の勢いに乗じた軍備拡張論に対して、『日本』の論説（社説）は「帝国の現地位」と題して、次のように主張し、気を吐いている。

『隠れたる國の突如として頭を擧ぐな、必らずしも列強の猜疾に償するなしと謂ふべからず。之れに備えよと云うは強ち無用の婆心たらざらんも、其の方法は軍備に限られたるにあらず。軍備を以て我と争はんものは獨り露國あるに過ぎず、其他は我親交國にあらざれば、則ち地境餘りに隔絶せり。将来の変は何人も保證し能はざるべきも、想像し得る年月の間に於て、之れと兵火相見ゆる機會ありとしも覺えず。懸念あらば早きに及んで之を處理し、能ふべくんば全く之を排除すべく、少なくとも其機會を緩うするは、現在の當局者が國家に負へる責任の第一なり。何ぞ之れが為に軍備拡張を説くべけんや。大戦を経たる吾人國民は霎時の休息を要望す。吾人は平和の間に處理すべき多くの事業を有すと知らずや』（第 6206 号）。

子規の添削を受けて学んだ碧梧桐は師亡き後の『日本』紙俳壇を支えており、この時期、「一日一信」欄で、しみじみと平和な旅だよりを連載していた（第 6207 号）。

『岩代郡麻郡山都村にて—
稲筵^{いなむしろ}雪ある山と大川と
桑黄ばむ山沿ひに麦の萌え出る
コスモスの冬近し人の猿袴
阿賀川も紅葉も下に見ゆるなり』

（関連「ウィキペディア」を参照にした）

[協力] 星野フサ、山岸博子、沼田勇美のみなさん

北海道大学総合博物館ボランティア ニュース 第 31 号

- ◆編集人:北海道大学総合博物館ボランティアの会(編集委員:石川、沼田、星野、永山、山岸、児玉)
- ◆発行人:在田一則
- ◆発行日:2013年12月1日
- ◆連絡先:〒060-0810 札幌市北区北10条西8丁目 Tel:011-706-4706
- ◆ボランティアニュースは、博物館のホームページからもご覧になれます。 <http://www.museum.hokudai.ac.jp>